

自然放射線と放射性物質

— 今、改めて放射線を考える —

日時 2011. 9.13 [火] 午後3時～午後5時

場所 徳島大学常三島キャンパス 共通教育5号館 2階 201教室

定員 100名(当日受付します)

講師 徳島大学アイソトープ総合センター准教授 **三好 弘一** (みよし ひろかず) 氏

工学博士(大阪大学)
徳島大学医療技術短期大学部助手、文部省在外研究員(アルゴンヌ国立研究所/
シカゴ大学/ノートルダム大学放射線研究所等)を経て、2000年より現職。
日本放射線安全管理学会放射性ヨウ素・セシウム安全対策アドホック委員会委員他。



2011年3月の東日本大震災と福島第一原発事故による影響は、連日のようにマスコミを通して報道されてきました。しかし、そこで使用される放射線や放射能に関する用語や防護の考え方は、日常的に使用されるものではないため、専門家等を除いては正しく理解されにくい状況にあります。

本学には、アイソトープ総合センターという共同教育研究施設があり、放射線を利用して行う教育研究の円滑かつ安全な実施を図るため、学内における放射線安全管理の徹底教育訓練及び安全管理に関する研究開発を推進しています。

このたび、同センターより、放射線化学、ナノ材料、放射線安全管理学をご専門に研究されている三好弘一准教授をお招きし、今般の放射線について理解するための基本とその背景について、学術的観点からお話頂きます。

参加費 無 料

講演概要

私たちの世界には、生活の上で日々受けている自然からの放射線（自然放射線）と放射性物質からの放射線とがあります。自然放射線は、宇宙線、大地、食物、大気からの放射線であり年間2.4mSvの線量であることが知られています。

一方、放射性物質は、放射線施設などの管理区域と呼ばれる所で使用されており、一般の人がこれらからの放射線を通常受けることはありません。このため、一般の人がこれらの放射線施設から受けてもよい放射線の線量限度を年間1mSvと国際放射線防護委員会（ICRP）の勧告によって放射線障害防止法に定められています。

今般の福島第一原子力発電所の事故による原子力災害では、放射性物質が煙のように大気中に飛散して、風により流されて大気中を漂っていたものが雨や雪によって大地に降って付着しました。この放射性物質からの放射線により広範囲に放射線量が上昇しました。

放射線からの防護に関する基本的な考え方は、ICRPにより、人体にただちに影響のする確定的影響を防ぎ、発ガンなどの確率的影響を低く抑えることが示されています。確定的影響は250mSvを超えると表れ、確率的影響は100mSvを超えるとガンになる確率が0.5%増加するといわれています。

本講演では、自然放射線と放射性物質について解説するとともに、放射線による人体への影響とICRPの放射線防護の考え方について解説いたします。

会場案内

徳島大学常三島キャンパス



※駐車場には限りがあります。可能な方はお車以外でご来場ください。

お問い合わせ先